

## 熊澤蕃山の朝廷に對する考

文學博士 三 上 參 次

私はこれまでかれこれと用事があつて此の會に出席することが出来なかつたのでありますが今晚は幸に本會に出席して諸君に御話申上げるのは誠に光榮とする所であります。「熊澤山蕃の朝廷に對する考」と題しておきました、これは一見小さい問題の様ではありまするがその精神たるや誠に大なるものがあります。この問題は單に過去現在に關係したのみならず將來にも關係あるものゝ様であります。本會は明治天皇の御聖徳を記念する爲の會でありまするが明治天皇は御一代の御鴻業中最も重大なるものは王政復古であります。之に先立つて尊王論對外思想が漸次世の中の問題となり遂にその發達の結果王政復古となつたのであります。就中朝廷對幕府の問題に就ては、國學者側の多が之を議論しましたが之に先立つて漢學者側も多く此の問題を研究したのであります。

凡そ國體本來の形として政權が朝廷にあり御稜威の輝けるときには尊王論や勤王論は起りません、最

上權が皇室を離れる時茲に尊王論は生ずるのであります。和氣清麿が忠義を表はしたときも妖僧道鏡が皇位を奪はれむとした時であります。勤王家なるものは多くは武家が政權を握つて後現はれるもので勤王論尊王論もかゝる時代に盛んになるのであります。

鎌倉幕府が初めて起るに先立ち武家は段々と勢力を張つて來ました平清盛が後白河法皇を幽閉せむとした時重盛は極力之を諫めた。世の中には國主恩、父母恩、天地恩、衆生恩の四恩があります。が其中最も重いものは國主の恩であると説いて父清盛を諫めた。源平盛衰記に載せられてゐるところのこの重盛の諫言ほど公明正大で堂々たるものは歴史中殆ど他に類例を見ない所であります。水戸の史論や頼山陽の議論も有名なものであるがしかし重盛の諫言が尊王論の最も早く且つ最も立派なものであります。又鎌倉時代には妙惠上人が北條泰時に向つて尊王論を説き日蓮上人もまた尊王論を説いてをりますがやはり重盛の説いたのが最も徹底してをります。

武家に政權が移つて後公武衝突の起つたときに勤王論の立派なるものが現はれ其實例も出るのであります。が必ずしもかゝる場合に限つたことではない。朝廷と幕府との關係は平和な時期に於ても公武の關係を論ずる人は幾人もあります。一方には開國以來萬世一系の天子があらせられる、他方には兵馬の實權を握つたところの幕府がある。天子には實權はおありなさらずとも常に上に立たれるものであるから是に於て衝突あるを免れない、例ばかの山縣大武が皇室をして實力あらしめたいといふ趣旨を論じたとき

松宮觀山は之を評して議論はよいが實際行ふべきものでないと言つた。かの寶曆八年に竹内式部が公卿を刺激して王政復古の計劃を立てようとしたとき又山縣大貳のときは、まだ九代將軍の時で江戸幕府の勢力の甚だ盛んな時である、かゝる時に當り討幕の軍を起すならばその結果は果して如何なつたでありませう蓋し承久の二の舞以上の不祥なことになるのは殆んど疑を容れませんが、周の文王は天下の三分の二を有しながら尙殷に仕へた爲めに清人から賞讃せられてゐる、幕府は日本全國を所有しながら尙朝廷を尊崇し之を立て、君臣の禮を守る所が幕府の美點である、今日では朝廷は幕府を信任せられ幕府は朝廷に服従して仕へる。それでよろしい、此の場合に當り朝廷に權を有せしめ奉らうとするものは志は結構だが實行は考へものである、麝香猫は麝香を有するが爲に殺され、翡翠は羽の奇麗なるが爲に殺されるのである、之と同じやうに天子が實權を有せらるゝことはと大に考ふべきことである、平和なる今日わざ／＼かゝる議論をするのは危険である、と云ふに歸着するのが觀山の此時の論であります。この議論に於て大貳は積極的であり、觀山は消極的で云はゞ現状維持を説くものであります。然しながら朝廷を尊び國家を思ふ至誠に至つては兩者異なるところはありません。一方を積極的尊王論と云はゞ他方を消極的と稱することが出来ませう。

かゝる尊王論をする人は多くの時代に於てあらはれたものであります。江戸幕府時代で最も早く有名な人は熊澤蕃山でありませう。蕃山は元祿の初めに歿しましたから觀山よりは六、七十年も早い人で

あります。然しながら皇室に對し奉つての思想は觀山と似通つて居るようです。蕃山は備前の新太郎少將に仕へた人で後京都大和などに居た人であります。公卿大名等にも交際があり幕府から注目せられ又嫌忌に觸れ下總の古河藩に預けられてそこで歿られた人であります、故に一寸考へると蕃山の朝廷に對する意見は王政復古にあつたものゝように思はれるが實際その著書によつて之を見ると消的極方面に傾いてゐたのであります。蕃山は當時第一流の學者であつて集義外書集義和書其の他の著書も多くありまするが、此等の書によつて見ますと彼の皇室尊奉の議論の大體は窺ふ事が出来るのであります、蕃山は元祿の初め七十幾歳で歿しましたからその生存の時代は江戸幕府の勢力の最も張つて居た時代であります。其れ故に皇室と幕府との關係を説く人はまだ少ないのであります。然しながら多少學問ある人で我國の歴史を知れる人は武家政治なるものはもとゞ我が國體ではなく頗る變則のものである事をすぐ感ずるのであります。この感じを起した人は多く皇室の問題を述べその幕府との關係を論ずるのであります。蕃山もこの問題に觸れてゐます。蕃山は周の武王と伯夷叔齊と何れを擇ぶかと云は、自分は勿論伯夷叔齊を擇ぶ、周の武王とならむよりは伯夷叔齊となつて嶽を首陽山に採つて死んだ方がいと云つてゐる、申すまでもなく江戸時代は漢學全盛で周の武王などは聖人として神の如く尊ばれたのであります。然るに蕃山がこの議論をなす理由は周の武王はたとへ暴君たりとは云へ其の主君を攻め亡ぼした人である漢土では之を聖人と云へど日本では純然たる亂臣賊子である、自分は伯夷叔齊を取ること云ふを俟たずと

いふの意であつて、この湯武放伐問題は江戸時代を通じて學者の議論の種であるのです、而して蕃山は漢學を修めつゝもよく日本の國體を忘れなかつたのであります。日本と支那とは建國の基に既に大なる差違がある、支那では天下を征服したものが王である、然しながら日本は萬世一系の皇室を戴くもので如何に大將軍たりとも勿論臣下である。之を説明せむとして蕃山は廻り遠い説明をなしてゐる。日本人は天照大神が我國に臨ませられた以前は殆ど禽獸に近いものであつた。天照大神か出でられて人の道を立てられて以來人間となつたのである。天照大神は天上の御方で他の人間の如く地生の御方ではない。之を繼承して神武天皇以來歴代の天皇は臣下を治め之を愛撫せられた。臣下として治められるものは皆地生國生のものである、假令如何ような人が出て天子の位に就く事は出來ない。こは萬世不易の皇室の特色である故に支那の如く國生地生ものが國王となる例は日本に於てはありうべからざるものである。といふ趣意で説明してをります。此の趣の論は蕃山の他の著書なる三輪物語の中の公卿と神主との問題の中にもあります。天照大神は我國の始め草昧のときに君臨まし、其御徳は人をして禽獸の境を脱せしめられた、其御徳は實に天よりも高く地よりも廣きゆゑ此恩は臣民は永久忘れてはならぬ苟も國のあらん限り其御子孫を御主君と仰ぎ奉るべである將軍も決して國王の位に上る事は不可能である、と云つてゐる。又或所では『天皇は萬世一系で下々のものは如何に權力を得ても如何ともする事は出來ない。支那にては天地を父母として氣化の人生れたと説く。かくて支那人は四民の別なく皆百姓である

故に才能の秀でたる人を士大夫といふ。一樣に天地の子なれば誰にても天下を取る人は王とする、決して怪しむべき事ではない、日本では國生のもを百姓と名けたので支那で云ふ様な意味のものではない。日本の天皇は天神の御子孫である。百姓とは全然異つたものである。百姓は禽獸を去る事ことからざるものであつた。この時に當り天照大神の神徳及其御子孫なる神武天皇以下御歷代天皇の御徳によつて風俗をなし禮儀を知るに至つたのである。故に其の御恩は永久に忘るゝ事は出來ないと云つてゐる。』

今日より考ふれば蕃山の議論も平凡なものであり又論旨の面白からざる點もありますが武家政治の既に四五百年も續いた江戸時代即ち武家ある事を知つて朝廷あるを知らざるものも或は無きに非ざる時代に於ては此等の論は實に名論卓説と云はねばなりません。蕃山の先生なる中江藤樹の著書には詳かに五倫五常を説いてありますけれども一般的の事を述べたので特に日本の天皇に就いて述べたところはないやうです、しかし蕃山はかくの如く一步を進めて公武の關係を説いて居ります。

さて蕃山は更に疑問を提出して「君臣の關係の此の如く深き我國に在りながら何が爲に實權は朝廷を離れて武家に移つたか」と云ひ之に答へては天皇が謙徳を失はせられた爲だと説明して居ります武家の代となつてからでも源氏、北條、足利氏等と代を變へたのも亦皆謙徳がなかつた爲だと云つてゐます、此の謙について藤樹は翁問答の中に説明して人を誹らざる仁慈を主として人の言を容れ善を好み惡を憎み禮を守る。舜や周公旦の如き人すらも自己の獨斷を行はずして人に接するに極めて丁寧であつた。周

公且は食つてゐるものを吐いて人に接したと云はれてゐる、これ皆謙徳の然らしむるところであると云つて居ます。

次に蕃山は王政復古と云ふ事は今の時代に於て果して出来うべきであらうか否かを論じてゐる、此の問題はペルリが來朝した後に於て論ずるのならば別に新らしくもないでせうが幕府の勢力の全盛なる蕃山の時代に於て論ずることは大膽なことであつたのです、さて蕃山は此の問題に就いては消極的議論をして居るのです。政權は到底天皇の御手に返るものでない假令武家より政權を返されたとしても長續きはしない。と云つて居ります、そして結局朝廷は幕府を信任し給ひ幕府は朝廷を尊敬し奉り相寄つて現状を維持する事が兩者の爲であると説いたのである。其の故如何に云ふに蕃山は次の様な意味の事を云つてゐる。『秩序の大本は朝廷である。この尊いものがあるために中華以外禮樂の國たるものは獨り日本のみであると云はれる。朝廷あつて初めて將軍も京都に參内し大名も將軍に仕へる事となる。若し朝廷が無かつたならば武家が源氏北條氏足利氏と漸次相更迭した様に日本も二三百年の間に天竺や南蠻と其の軌を一にしたかも知れない、然しながら日本に於ては假令草莽の臣でも一度起つて天下の政權を握るときは古を知り君臣の禮を自ら知るに至るのである。かくて將軍は朝廷に忠節を盡し獻上物を奉るのである。將軍が實權の無い朝廷をかくの如く尊信せらるゝを見て大名其外も其の例に倣ひ又將軍に忠節を盡すのである。偶ま大名や人民の中に將軍に對して叛逆を企てむとするものがあつても朝廷に對

しての忠節を見て心を齟して譜代の臣となるのである。」と云び、かくの如くにして天下は泰平なるを得ると云つて居ります。若し一時朝廷が政權を獲らるゝとしても永續きはするものではない變化は世の常態である但し日本では天皇は天照大神の御子孫であつて地生でないから天皇の御系統が斷絶する事は永久にないけれども地生は常に變化して止まない、故に日本の様な特別な關係のある皇室は成るべく天下の實權を離れて「柔かにして上におはしませば」いつまでも日本の主君として永續させらるゝとであらう又武家は如何なる實權を握つても朝廷を輕忽にし奉る様の事があつてはならない。何處までも攝政職たる事を自覺して行かねばならぬ。と云つて居ります。まことに王政復古を企てた所で此の時代の形勢を考へて見れば後醍醐天皇の例に鑑みても容易に結果を推定する事が出来る。後醍醐天皇の御時は北條氏の人心を失うた時であつたにも係らず、一旦辛うじて取り返された實權は以前よりも、尙惡しき形態に於て捨てられねばならぬこととなつたのである。然るに蕃山の時代は如何にと云ふに武家政治は既に永く續き武家の中に於て君臣主従の關係もよく立つてゐる、此の時に當つて微力を以て王政復古を企てるのは徒らに平和なる天地を攪亂するに過ぎない、故に蕃山は「武家が萬一天子の御位に昇らうとするが如き事あらばそれは叛逆此の上もない事であるが皇室が又實權を回復なさせられむとするも不可で兩々相寄り現狀を維持するのが却つて皇室の御爲である」と述べて居ります。天皇は超然と上に座しまし將軍は下にあつて時代によつて源氏、北條氏、足利氏と云ふ様に變化する、今日の語で云へば彼は將軍を恰も責



任内閣の變化の如く見てをるので、故に其の交替は決して怪しむべきものではない、たゞ天子は此の責任を離れさせられて上に立たれるところの萬世一系の御方であると論じてをります。英國の内閣は更迭するけれども王室はその渦中に入らない、蕃山の議も之に近いものでありますと思はれます。故に松宮觀山と同じく蕃山も亦消極的論者の立場である、加之朝廷尊崇の法式は禮樂儀式を重くするにある、然しながらあまり宮殿を結構にし御料地の多きに過ぐるも却つて害がある、實無くして物毎過るときは災起る、是れ天の誠めなりとさへ述べて居ります。

尙また蕃山の著書といはるゝ夜會記の中にも公家は武家の客としてこの國のあらむ限り大切にもてなし奉らねばならぬ、然し御自分できりもりをなさる事は不可であるといふ意味を繰返してをります、まことによく消極的尊王論の趣旨を示して居ります。蕃山の意見には尙色々の議論もありますが結局は茲に歸すると考へます。

然らば蕃山はどうしてかゝる消極的立場を取るに至りましたか。之を知るには當時の形勢を察しなればなりませぬ。蕃山の時代は幕府の權勢の全盛な時であつて朝廷が如何にも幕府を憚らせられたと云ふ事は事實である。後水尾天皇は家康の在世の中から位にあらせられました、どうしても幕府と意思が疎通せず多くは御憤懣に渡らせられたる事は明かであります。後光明天皇も英邁に渡らせられ御若くして崩御になりましたが、御父帝後水尾天皇が之に仰せられました御言葉の中には天下の形勢を憤らせ

られるは御尤もなれど今の間は何事も辛抱あらせられざるべからずといふ御旨のことが見えます御水尾天皇の御英邁を以てしても當時幕府に反抗する事は不得策と御考へ遊ばしたのであります。右の如き情勢ですから藩山の時代に於て王政復古の計畫をなすとしたならば必ず失敗に終つたに相違なかつたでありませう。後鳥羽天皇の御時より尙一層御氣の毒な結果に終つたかも知れません。こゝが識者の恐れたところで今日から考へても實にそう思はるゝのであります。後醍醐天皇の建武中興はやがて南北朝分立となり、室町幕府の成立となつて皇威は益々失墜しました。後醍醐天皇は英邁な君にましましたけれど、建武中興が大局から觀て果して利益であつたかどうかは大分疑問でありませう、若し一時の中興がなかつたならば朝廷もあれほど窮境に陥らせらるゝことも無くて濟んだかも知れませぬ。これはたゞ假設の問題です。此等の點より考へて藩山が消極的尊王論を主張したのも無理のないことゝいはねばなりません、流石に藩山であるだけ議論も時勢に適したものの様に思はれます。

又かの承久の役に際して御土御門帝は後鳥羽上皇の御計劃を幾度も御諫め申されましたが御用ひがなく遂に承久の役となり、やがて後鳥羽上皇は隱岐に、後土御天皇も土佐に遷幸になりました、當時中納言光親も後鳥羽上皇を御諫め致したのですが是亦御聽許なかつた、この役に關し大日本史は北條義時の傳中には義時遂叛と書いて居りながら、之を叛臣傳中には數へては居りませぬ、大義名分を重んじた大日本史が之を叛臣傳中に置かないのは特に注意を要する事と思ひます。かかる大勢の場合に於て後鳥羽上

皇をお勧め申して軍をはじめたものと之をお諫め申したものとがいつれが皇室の御爲國家の利益になつたでありませうか。容易に判定は出来ません。又竹内式部が寶曆八年の諸公卿を刺激し將に變の起らむとしたとき關白近衛内前をはじめ溫和なる側の人々は之を未前に防ぎ止め、血氣に逸れる諸卿を退職せしめて關東に知れないうちに之を壓へて仕舞ひました、此の時復古の事を企てんと御勧め致して處罰せられた人々も忠臣なれば、之を御諫めした人もまた忠臣である。輕擧をして斃虵に終るを恐れたから之を中止する様に御諫めしたのである。いづれも皇室を思ふの情は甚だ切なるものがある、近衛家の家訓にも皇室の事に就ては身命を擲つて盡すべしと云つてあります。一個人の相談に乗るときにも、甲は右すべしといひ乙は右すべからずと云ふ場合があります、其親切たるや同じでありますされば其人が或は右し或は右せざるによつて成敗がありましても甲乙の友情は疑ふべきでなく、たゞ明不明の問題が残る位の事です、之と同じやうに忠不忠を區別する事は餘程熟考を要する問題であります。まことに歴史上の事柄は當時の時勢をよく調べよく考へて見なければ容易に批判を下し得べきものではありません。一昨年の内閣の交迭の如きも、今日の總選舉の如きも、兩派の新聞紙の各主張せる如く正邪善惡はさう容易に判定は出来ませぬ、善人は常に色白く惡人はいつも赭面といふやうに芝居では直ぐに分りますが歴史上の事は内部に立ち入つて其事件の真相を確め、更に深く其時代の真相を研究せなければ批評は出来ません。必ずしも事の成敗が正邪曲直を定めるものでないは勿論の事です、承久の役等に於て之を防止せ

むとした人々も決して不忠の人ではないと思ひます。

要するに蕃山の消極的尊王論も時代をよく考へて観ると皇室國家に對しての深切なる考が其の内に含まれて居る事が判ります。かゝることは過去に於ても、現在に於てもまた將來に於ても、毎々あらはるゝ事とおもひます、故に此の難問を提出して愚見を述べ併せて御判定を乞ふ次第であります。(完)

苦冤難洗恨難禁  
俯則悲傷仰則吟

昨夜城中霜始墮  
誰知松柏後凋心

(藜園遺稿)